

この世には属していない神の国

ヨハネ18:33~37 / 李正雨師

今日は永遠の王キリストの主日です。この主日は、1925年に教皇ピオ11世が各国のビショップに回勅を下して定めた日です。この日が決まった1925年は、第一次世界大戦が終わった後でした。多くの国は戦争によって貧困になり、国家主義が蔓延しました。ヨーロッパのいくつかの国を代表していた政治家たちの名前を聞くだけでも、当時の状況を推測することができますと思います。ソ連のスターリン、ドイツのヒトラー、イタリアのムッソリーニなどは、ファシズムによって、国民を国家第一主義へと洗脳しました。そのため、国家間の競争を越え、互いを敵対視したり、差別したりすることが起こりました。このような状況から生まれた日が永遠の王キリストの日です。永遠の王キリストの主日は、私たちみんなの王はキリストであり、私たちみんなはキリストの民であるという意味を持っています。キリストの民の中では敵対して差別することはなく、国家主義、全体主義などありません。私たちルーテル教会などのプロテスタント教会も、このような精神に参加し、その時から今日を永遠の王キリストの主日として守っています。

しかし残念なのは、多くの教会がこの日を支持して、平和と平等を語っていましたが、何年もしないうちに、第二次世界大戦が起きたというのです。そして今までも、多くの国では戦争が起きています。私たちキリスト教の神様だけでなく、イスラムの神様、ユダヤ教の神様、ヒンドゥー教の様々な神様も、平和について教えているのに、戦争は止まらず、しかも宗教の教えによって起こった戦争もあります。一部ではこの戦争を、聖戦、聖なる戦争だと言っています。果たして私たち人間は、神様を神様として崇め、従っているのでしょうか。神様の御名を借りて、私たちの欲を満たしているのではないか、深く考えてみななければなりません。今日の福音書は、ピラトがイエスさまを尋問する物語です。この物語の中で、私たちはこの世が追求することと、神の国が追求することが何なのか、何が違うのかなどが分かるようになると思います。33節の言葉です。「そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、『お前がユダヤ人の王なのか』と言った。」

ピラトがイエスさまを尋問する理由の一つです。イエスさまがご自分を王だと言ったのかということです。当時の王は、ローマの皇帝から認められなければなりません。皇帝の認めなしに自分を王だと言えば、それは反乱と同じことであり、ピラトは総督として反乱を抑えなければなりません。皆様のご理解のため、少し当時の政治の状況を説明します。イエスさまがお生まれになった時の王は、ヘロデ大王と呼ばれた王でした。彼はイスラエル全体を治めていた王でした。当時のローマは、属国に対する伝統と宗教などを認めてくれる穏やかな政策をしていたので、直接的な統治はしていませんでした。ローマの政策に従い、問題を起こさなければ、属国の政治を認めてくれたので、ヘロデ大王は、イスラエルを王として治めることができました。時間が経ち、ヘロデ大王が死んだ後、イスラエルはヘロデ大王の息子たちに与えられました。イスラエルを受け継ぐための息子たちの戦いもあり、力を分散させるのがローマにとっては良かったので、イスラエルは、三か所に分かれます。一つ目、ユダヤとサマリアはヘロデ・アルケラオスに、二つ目、ガリラヤの西とベレア（ユダヤの東）はヘロデ・アンティパスに、三つ目、ガリラヤの東とイトラヤとトラコンはヘロデ・フィリッポスに与えられます。

福音書の中で、アルケラオスはマタイによる福音書2章、アンティパスとフィリッポスはマルコによる福音書6章に登場します。アンティパスとフィリッポスは、洗礼者ヨハネの死と関係があります。洗礼者ヨハネがヘロデに「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されなていない」と言って殺されたことを、皆様は覚えているでしょう。ここでのヘロデはアンティパスであり、兄弟はフィリッポスです。マタイによる福音書2章で登場しているアルケラオスは、横暴な政治をした人物です。それで、ヘロデ大王を避けてエジプトにいたヨセフとマリアは、アルケラオスがユダヤを受け継いだということを知り、ユダヤのベツレヘムではなく、ガリラヤのナザレに移動して定住したのです。アルケラオスはユダヤとサマリアを何年間か治めましたが、横暴な政治によって民の反感を買います。この反感は、アルケラオスが自分の内縁の女と結婚することを発表すると、募り募って、ファリサイ派を中心に暴動が起こりました。この時、暴動を鎮める過程で約3000人のユダヤ人が命を失いました。このことをきっかけにして、ユダヤとサマリアの人々が連合して皇帝にアルケラオスを告発し、アルケラオスはガリア（今のフランス）に退けられ、そこで死にました。そしてアルケラオスに代わってユダヤに派遣された人が、ローマの総督ピラトです。

当時の状況がこうだったので、ピラトは王や暴動という言葉などに敏感だったと思います。ところが、今日の福音

書でピラトはイエスさまを尋問するとき、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋ねます。この尋問によると、イエスさまがピラトに渡される時、王を詐称した罪で渡されたのだということを推測することができます。今日の福音書であるヨハネによる福音書には、イエスさまの罪名が詳しく記録されていませんが、ルカによる福音書23章を見ると、イエスさまがどんな罪名によって渡されたのかが書かれています。ルカによる福音書第23章2節です。「そして、イエスをこう訴え始めた。『この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。』」

イエスさまの罪名は3つです。民を惑わした事、税金を納めることを禁じた事、自分を王たるメシアだと言った事です。ところが今日の福音書でピラトは、最後の罪名だけを持ってイエスさまを尋問しています。その理由は何でしょうか。私の考えでは、当時のピラトの状況を見たら、王を詐称した罪が自分の仕事と直接関係しているからだと思います。もちろん、ピラトは総督として民を守り、税徴収を円滑にしなければならない義務がありました。しかし当時は、税徴収に反対しているユダヤ人たちも多くて、サンヘドリンというユダヤ人の決議機関もあったので、ピラトはイエスさまが王を詐称したことがあるかということだけに集中したと思います。この尋問に、イエスさまはピラトに、この質問が誰によるものかを尋ねられます。自分の考えから出た質問なのか、他の人に聞いたものなのかを尋ねられたのです。この質問がピラト自分から出た質問であれば、多分イエスさまは全く違う話をピラトになさったかもしれません。しかしピラトは、このようなイエスさまのお尋ねに「わたしはユダヤ人なのか」と答えます。イエスさまだけでなく、自分が治めている民に対しても、全く関心のない姿です。

今日の説教の中で言及された人々は、多くの人々を治めた指導者たちです。自分たちだけの確たる考えを持って、様々な形で民たちを導きました。しかし、この中で民のために自分を犠牲にして、民のために平和をもたらした人は、一人もいません。誰もが自分中心であり、自分のために民を犠牲にしました。ファシズムを叫んだヨーロッパの指導者たちは、第二次世界大戦を引き起こし、現在も宗教の教えという名目で、指導者たちは民を犠牲にしています。ヘロデ大王は、メシアが生まれたという占星術者たちの話を聞いて、ベツレヘムの2歳以下の子供たちをみんな殺しました。ヘロデ・アルケラオスは自分に反対するという理由を持って、約3000人のユダヤ人を殺し、ヘロデ・アンティパスも自分のことを指摘するという理由で洗礼者ヨハネを殺しました。ピラトは総督の席を守るためには、イエスさまを尋問しましたが、民の他のことには、関心さえもありませんでした。イエスさまをピラトに渡したユダヤ人の指導者たちも、自分たちの民のためではなく、自分たちの地位と席を守るために、イエス様を渡しました。

私はこれが私たち人間の姿、この世の姿だと思います。みんなが高い地位を求め、人々を治めてほしいと願っていますが、誰も人々のために自分を犠牲にしたり、仕えたりすることはしません。それで、イエスさまは今日の福音書36節で、ご自分の国は、この世に属していないと言われたと思います。世の中には、良いものがないので、ローマの信徒への手紙3章10節の言葉のように「正しい者はいない、一人もいない」からです。それにもかかわらず、イエスさまはこの世のために、このような私たちのために、この世に来られました。権力を求め、出世することを願う私たち人間に、神の国は何なのか、真理は何なのかを教えてください。この世に来られました。37節でイエスさまはこうに言われます。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」

このようなイエスさまの言葉に、ピラトは「真理とは何か(38節)」と言います。ピラトのように、世の基準に属している人たちは、イエスさまが言われた真理が何なのかは分からないでしょう。彼らにとっての真理は、自分のための力であり、自分の名を高めることです。いつも、もっともらしい名目を立て、他人の犠牲の上に自分の国を建てるのが彼らの真理なのです。しかし、神の国は違います。隣人に仕え、他人のために犠牲にする所、助けるために自分のことを惜しまず出して、自分を低くする所、自分ではなく隣人の幸せのために祈る所、この場所が神の国です。イエスさまはこれが真理だと言われます。

おそらく神の国は、多分この世に属していないものではなく、属すること自体ができないものではないかと思えます。皆が自分だけのために生きていますが、この国に属している人は、神さまと隣人のために生きようと努力しているからです。そして神さまは、この真理を私たちの教会の中に、私たちの信仰の中に、入れてくださいました。私たちが世の中で神さまに従って生きることができるよう、この真理の中でこの世から自由にすることができるようになされたのです。この精神、この信仰が永遠の王キリストの日に、教会に集まった皆様と共にありますように。この真理が私たちを通して世の中に知られることができますように、主の御名によって祈ります。